

共同研究プロジェクト

「経営学部国際ビジネスコミュニケーション(IBC)プログラムの教育効果分析と改善について」

〈中間報告〉

白石万紀子

2021年4月のカリキュラム改定に伴う経営学部の特色あるプログラムの一つとして、経営学部では「国際ビジネスコミュニケーション(IBC)プログラム」が開始された。本プロジェクトペーパーでは、プログラムの目的、構成、実施体制、教育内容を記録し、実際の学生の意欲や成績の伸び、到達目標の変化、到達目標への達成度を分析し、さらなる改善への提案を行うことを目的としている。

IBCプログラム設置のきっかけは、21世紀に活躍するグローバル人材が必要とする能力を学生に身につけさせるためには、英語科目をスキル別、レベル別に行うという従来からの方法から一歩進んで、英語でのコミュニケーション能力を高め、国際的視野で自律的かつ協働的に問題発見・解決ができるようになることを目標とした、英語と専門科目とが連動した4年間のプログラムが必要ではないかという経営学部英語教員グループの危機感であった。

そこで2019年から本格的にCLIL(Content Language Integrated Learning)、EAP(English for Academic Purpose)、EMI(English Medium Instruction)の研究を進め、そこで得られた知見を盛り込んだ、経営学部学生向けの4年間のプログラムを開発した。

2020年の1年間をかけて、具体的なプログラム内容や専門科目との連携、専門科目を英語で勉強する前段階の科目の詳細設定、プログラムの途中で組み込む各種留学との連携、留学先で必要となるスキルの分析とその教育方法分析、教材と課題の検討、学生の習熟度別の教育方法詳細検討を経営学部英語担当教員の中でチームを組み行ってきた。

2021年に入り、コロナ禍の様々な制限下で動画提供を中心としたプログラム広報活動を行い、実際どれだけの人数が集まるか不安がある中のスタートではあったが、幸い想定していた人数通りの応募があり、プレイスメントテストの結果に基づいてIBC aレベル2クラス、IBC bレベル2クラス、Pre-IBCレベル2クラスの計6クラスで4月からIBCプログラムをスタートすることができた。

本プロジェクトペーパーでは第一部として履修学生のプログラム内でのPre-IBC、IBC b、IBC a間の移動（レベル上昇、下降）の状況、プログラム離脱の状況、その理由を調査し、より多くの学生に継続を促しまたレベルアップできるプログラムへの改善提案を行う。また第2部ではプログラム参加学生のself-beliefs（motivation, self-efficacy, creativity, problem-solving skills）がどのように学生の学習成果に関与するかをテーマとした研究を発表する。第3部では新入生に対しどのようにIBCプログラムに関心を持ち参加を促せるかを考察し、新入生の思考プロセスに即した情報の提供を提案する。第1部から第3部までの各部において現在情報収集が進行中である。

（プロジェクトメンバー：白石万紀子

河内智子

セロン・フェアチャイルド

チャールズ・ハースト）